

ところで、先ほどから「高齢期」や「子ども期」のバラレな延長について述べているのだが、このことは、「人間の三世代モデル」での「働」の役割、ということと関係してくる。それは、「後期子ども」や、「前期高齢者」の時代においては、いわば「働」と「遊」の複合形態」といったものが重要となる、ということである。

実際、おそらく「前期高齢者」にとつて望ましいのは、現役時代と同様にフルタイムの賃労働で働くということではなく、かといって完全にリタイアするというのでもない、つまりまさに「働」と「遊」の複合形態」ないし中間的な形態ではないだろうか（実際、NPOや様々なコミュニティ・ビジネスに関わる退職者が増えている）。そして、同時に「後期子ども」、つまり大学生の年代や、転職や場合によりフリーターなどもしながら試行錯誤の時期を過ごす二十代頃の時期も、「働」と「遊」の複合形態」と言える。

こうした傾向は、おそらく私くらいの世代から現れ始めていたことだと思われるが——現代社会における「青年期延長」という議論はもちろん以前からあり、私が学生の頃には、たとえば小此木啓吾氏の『モラトリウム人間の時代』が少し前にベストセラーになっており、大学四年で進路決定がどうしてもできず大学院に進んだことをまさに「モラトリウム」と自分の中でとらえていた——、現在大学で学生たちに接していて、この「後期子ども」の時代という傾向はますます顕著になっていると感じる。

逆に言えば、これだけ人生の時間が長くなった時代なのであるから、また世の中が一層複雑になっている時代なのだから、「フルに働く」ようになるのは三十歳前後に至ってからであり、それまでは試行錯誤や模索の時期と考えたとしても何らおかしくないし、それは「直接の生産活動から自由な子どもの時期こそが人間の創造性の源」という先述の理解からもそう言えるのである。ただしこの場合、先ほど述べたように、「前期高齢者」のほうに賃労働ないしフルタイム労働からリタイアし、限られた仕事総量のうち十分な量を若い世代に与える、ということが大前提になる。

(*)人生の中のワークシェアリング

以上のような議論との関連で、「人生の中のワークシェアリング」ということにふれておきたい。ワークシェアリングに関する議論が活発であるが、私としては、それを次のような意味に少し広げて解釈してみたいのである。

現在の日本のシステムでは、「子ども—現役時代—老人（退職者）」というライフサイクルにおいて、「仕事」は現役世代の時期に集中し、子どもと老人の時期は基本的に仕事からは完全に離れている、というのが前提になっている。しかし、平均寿命が八十歳に及ぶいま、このように固定的に考える必要は全くないのではないだろうか。つまり、たとえば現役世代の間でも、ある程度の期間仕事から離れ、大学院などで勉強をしたり、比較的長期のリフレッシュ休暇の期間を過ごしたりするとか、転職して「新しい人生」を送るためにある程度の準備期間を過ごすといった姿があってもよいし、逆に六十歳台以降でも、完全にリタイアするのではなく、様々な形の雇用や社会参加の機会があってもよい。つまり、人生全体の中で

「仕事」と「休暇」の時期を様々に割り振ることが可能であつてよいはずであり、これからの時代はまさにそうした時代なのではないだろうか。私としては、このような考え方を「人生の中のワークシェアリング」（つまり人生全体の中での仕事と余暇の時間配分）と呼んでみたい。このように考えると人生に対するある種の「ゆとり」のようなものもできるし、また今の日本社会には特に必要な発想ではないだろうか。

高齢者と前期子ども・後期子どものコミュニケーション

一方、以上の議論は世代間のコミュニケーションのあり方という話題とも関連してくる。先ほど「老人が子どもに教える」ということの存在が、人間の高齢期が長い基本的な理由ではないか、ということ述べたが、こうした認識を踏まえて、筆者らは以前から「老人と子ども」統合ケア」というテーマに関する調査研究などを行ってきた。これは、子どもとケアと高齢者のケアを何らかのかたちで一緒に行うことで、それが子ども・高齢者双方に一定のプラスの効果をもちうるという内容のものであり、具体的には、たとえば老人ホーム等の中に「おもちゃ美術館」を設けて地域の子どもが自由に出入りできるようにし、それが老人と子どもの日常的なコミュニケーションの場となる、といった例に示されるものである（東京の中野区にある芸術教育研究所の多田千尋氏がこうした試みを先駆的に進めておられる。広井編著「二〇〇〇」参照）。

「老人と子ども」統合ケアという場合に想定されていたのは、主に小学校くらいまでの子どもと高齢者との関わりだったが、先ほど見たような「高齢期」「子ども期」双方の延長ということを考えると、今後は、退職高齢者と高校生から大学生ないし二十代くらいの者の様々な交流（知識や経験の伝授を含む）を図っていくことも重要になってくると思われる。つまり、「前期高齢者」と「後期子ども」という年代は、筆者が見る限り、ともに「働」と「遊」の複合形態」という年代である点で、（意外に）「波長」が合うところがある。私は現在大学で「若者仕事おこしプロジェクト」ということを始めているが、退職高齢者が参加する形で世代間交流の要素を取り入れていけないかと考えており、大学という場所がこうした様々な世代が日常的に出会い交流する場のひとつになっていけば意味の大きいことではないかと思っている（やや文脈は異なるが、アメリカの大学でキャンパス内に老人ホームなどを設置する動きが広がっており、「カレッジ・リンク型」と呼ばれるようであるが〔日本経済新聞二〇〇四年五月一九日夕刊記事「大学構内に老人ホーム 米で盛況」参照〕、基本的な発想は同じようなものといえるだろう）。

ちなみに、「ひとり暮らし世帯」の分布を年齢階級別に見ると、男性と女性とでは大きな違いがあり、男性の場合は二十代前後に多く、他方女性の場合は若い時期と並んで七十代に際立って多いという目立った特徴がある。前者は学生などがアパートに住んでいるといったイメージであり、後者は夫を亡くした高齢女性がひとりで住んでいる、というイメージである（しかも後者は近年急激に増加している）。まさにこの両者は、コミュニティとの関わりや社会的役割から疎外されやすく、それぞれ「社会的ひきこもり」や「寝たきり」と近い関係にある。こうした視点からも、いま述べたような高齢者と若者世代との交流やつながりが重要になってくるだろう。